

英國の自然と人間（三ヶ月間の観察）： 評論

著者	戸澤, 正保
雑誌名	龍南會雜誌
巻	152
ページ	1-9
発行年	1913-11-05
その他の言語のタイトル	英国の自然と人間（三ヶ月間の観察）： 評論
URL	http://hdl.handle.net/2298/6271

英國の自然と人間——三ヶ月間の觀察

在英京倫敦 教授 戶澤正保



戶澤姑射先生は、本年三月十七日門司解纜の宮崎丸で、渡歐の途に上られた。この篇は、先生が委員の御願により、御多忙の時間を割愛して、寄稿せられたものである。多大の感謝を以てこれを拜讀すると同時に、多大の希望を囑して續篇を待つのである。送別會の席上で、先生自らの仰せられた、所謂「短軀を提げて」、倫敦のかがやかな廣い街、さては木の葉もみづる近郊を、懐しい故國の歌でも吟み乍ら、捕へて遁がすこなき眼光に Nature and Man の交渉を、今でも觀察して居られやうと、思ひを遙かな空に寄せて、先生の祥福を祈りつゝ、題と本文との間に挿ませていただく

(委員)

僅々三ヶ月間の觀察否寧ろ感想であるから、餘り當てにはならぬかも知れぬ、併し第一印象と云ふものは、間違つて居ても何でも、一種取るべき所があるやうに思ふ、勿論人に依つて其印象の價値に差違のあるは致方ないが、同じ人間に取つては、第一印象といふものは或物であるとは間違のない處であらう。

かういふ立場から、予の觀予の感じたる所を記して見やう。

日本に居た時は日本程景色のよい處はない、瑞西の持て囃さるゝのは、歐羅巴の他の部分が落莫たる爲めであらう、なごり考へたものであるが、實際船が日本を離れると、支那でも印度でも、阿刺比亞でも、阿弗利加でも、船の通過する、約七八千哩の處、之を日數にすれば一時間十二哩の速力で約一ヶ月奔る間、眼に觸るゝ山河の眺めは誠に落莫たるもので、日本程景色のよい國はないといふ感がしみじみ起る、然るに一度地

中海に入つて、伊太利、佛蘭西、西班牙の南岸を瞥見すると、丁度日本の景色を眺めると餘り變らぬ感がある、それでも負け惜みで、まだ日本には及ばぬと、獨斷的な判斷を下して自ら慰める、併しビスケー灣も通過して愈よドーバーの海峡へ來ると、英國が手に取るやうに目前に展開する、此景色を見た時いくら、残念でも、日本にもない美しい景色だと感心せざるを得ない。

尤も予の見たのは丁度時節もよかつたのである、五月初旬で若葉若嫩の時季だから、何處の山河でも新衣を纏ひ新粧を凝らした際で、同じ草木でも一番色の美しかるべき折だ、併しそれにしても色彩が莫迦に濃厚で艶麗であつた、ドーバーの邊には山といふ程の高い山は見ぬが、低い丘陵がのんびりと蜿つて居て、それが濃艶な綠色で掩はれて居る、丘陵の頂上にある赤煉瓦の建物や、處々に散在する、同じく赤煉瓦の百姓家なごが、其綠色と、はややかな調和をして居る、海岸には白堊の巖壁が削り立てたやうに一二里の間連なつて見わる、何の事はない、西洋の油繪や繪葉書にあると同じ濃艶な色彩だ、日本の景色は墨繪で描いた方が一番眞に近いと云ふ説は此處だと思つた。

それでも負け惜みは、中々引込まぬ、かう色彩の美しいのも一寸の間であらう、後一ヶ月も経たなら普通の綠色になるだらう、いや天氣と氣候が悪いと云ふから、迎も草木と雖も健全な發達は出來まい、葉綠素だつて健全な發展は出來まい、偶も春の時候に欺かれて芽は出して來たが、今に後悔して萎れて仕舞ふだらうなご、又しても獨斷的な判斷を下して居た。

それから倫敦へ來て見ると、大きな公園が幾つもある、ハイドパークなどは廣いとは聞いて居たが、上野の公園が五つも六つも其中に這入らうとは思つて居なかつた、其廣いものにも驚いたが、其廣い地面が殆んど全

く芝生になつて居て、其綠色はドーバーで見たのと同じ濃艶なものである、熟く視ると芝が日本のとは違ふ、寧ろ雜草に近い、形狀から云へば、たしかに日本の芝の方がよい、たゞそれが集まると莫迦に濃厚な綠色を呈する、そして冬でも綠色が失せぬさうである、其處へ持つて來て樹木が澤山ある、大抵落葉樹だが其枝葉の繁茂して居ることは夥しい、そして其葉は同じく濃厚な綠色である。

これは公園の事だが、更に郊外へ出て見ると、同じく綠色が美はしい、見亘す限り土地といふ土地は青毛氈を敷いた様で、其間に樹木が構廣がりに廣がつて散在して居る、或は森を成して居て、其中から尖塔が頭を出して居る、東京の郊外などには見られぬ圖だ、東山や嵯峨御園邊りとも趣を異にして居る、但しそれに優るとは云へぬやうである。

それから七月になつて、予は英國の北部の湖水地方レイキンストリクタからマンチエスタ、シエツフィールド邊を十日計り旅行して見たが、瀟車の兩側から見亘す限り、小高い丘陵がゆる／＼と蜿つて居て、火山の裾野のやうに展開して居る處、何處かのんびりした英國人の氣質を圖で表はした様で心持がよい、そしてそれが矢張り悉く濃艶な綠草を以て掩はれて居る、ドーバー通過以來二ヶ月餘になるが綠色は少しも衰へぬ、誰も知る通り英國は農業國でない、だから耕された土地といふは滅多にない、十中の八九分は綠野である、即ち牧野である、「農は國の基なり主義」の我等には勿体ない感がする程、思ひ切つて結構な土地を野原にして置く、其間に榆エルクだの、櫛ビチだの、櫛オクだのといふ英國特有の樹がびた／＼と手を擴げて繁茂して居る、其下に牛や羊の群が悠々と草を食んで居る處は、何とも云へぬ景色だ、尤も此様な景色は形狀よりも色彩を以て優つて居るのだから、之と反對の日本の景色と比較するのは無理かも知れぬ、兎に角見る眼には大分美しい、少なくとも日本ばかりが

景色のよい處ではないと云ふ決論に達せざるを得ない。

湖水地方は英國人の大に誇る處で、蘇國スコットランドの湖水よりも寧ろ優るとも劣りはせぬと云ふ事であるが、實際よい景色だ、先づ日本の芦の湖中禪寺湖邊に似て居るが、も少し温健でも少し奇麗だ、但し倒富士さかまきを映す芦の湖の奇觀や、霹靂を載せた雨雲の將に覆らんとするやうな黒髪山を戴く中禪寺湖の壯觀はない、何處迄も温和で、例の濃艶な綠草と、いや繁りに繁る横擴がりの樹木とを以て掩はるゝ、なだらかな丘陵に取圍まれて居る、予は湖水に沿うた大道を、往復約三十哩ばかり乗合馬車で廻つて見たが、羨ましくて、いま／＼しくてならなかつた、序ながら西洋の陶淵明など、誰やらがいつた、詩人ワーズワースの閑居の地たるグラスミアの湖水を見た、これは小さな湖水で、画津湖の上画津だけ位しかないが、一寸よい處だ、詩人の墓をも訪うたが、素朴な石片に姓名と生死の年月日だけを記したもので、其素朴な處が大に氣に入つた、詩人の住居した、小屋コッティヂも其儘に保存してある、極めて質素な小屋だ、同じ頃生存した詩人、サオセイやデクキンセイなどの住居も其近邊にあると云ふ事であるが、それは見なかつた、湖水派詩人レイキスティルといふ團體も中々乙な事をやつたものであると思つた。

それからシエツフィールドといふ町は御存じの通り及物の工場で有名な土地だが、町は喧々囂々の商業地で、烟と塵とで、俗惡極まる處だ、然るに其郊外と來ては、丘陵あり溪流ありで、英國式の風景の粹を集めたやうな土地で、其矛盾に驚いた、町が俗惡だからとて、郊外まで俗惡であらねばならぬといふ理由は何處にもないから、何も矛盾な事はないが、矛盾なやうな氣がした、事程左様に風景の美に一本參つた、殊に其邊は狩獵地であるので、人家は少しもなく、路傍から兎が人影に驚いて續々と飛出すのが妙であつた。

かういふ譯で見た處英國の風景は大分よい、歐州大陸の風景は何ういふ風か知らぬが、恐らく大差はないのであらうと思ふ、これで風景の大略は諸君の腑に落ちたらうと思ふが、樹木の種類と形狀どに就て一言して置きたい。

樹木の種類は日本とは大分違ふ、第一に日本植物の美觀たる松や杉はない、松は少しはあるが何れも矮小で亭々と天を摩するものはない、杉に至つては植物園に標本として植ゑてある斗りらしい、其代り日本では見られぬ榆エルムや榎ビチや櫟オークの大木が到る處にある、尤も日本にも山國には此等の木も中々盛にあるさうであるが、平地にはないやうだ、そして日本のは眞直に伸びて居るさうであるが、英國のは何れも横擴がりに横がつて、一樹の影が一畝位の面積を掩うて居る、枝は低い處から澤山出て居る、従つて幹は眞直に伸びて居ぬ、恐らく一間と眞直に伸びて居る處はあるまい、先づ盆栽向の形狀をして居る、之を縮小したならば其儘よい盆栽になる。殊に櫟オークと榎ビチは美しくて且つ堅實といふ觀念を興へる、日本人が櫻を誇りとし且つ理想とする如くに、英人は櫟オークを誇りとし且つ理想とするは諸君が御承知の通りである、此外日本の梧桐と楓とを中和したる如きプラトナスやシカモアなど云ふ樹が目につく、椽さちに似たる馬栗といふ樹も非常に多い、そして何れも横擴がりの樹である、英書によく出て來るホーンソーンといふ樹は喬木と灌木との間位の樹であるが、これは薄紅ピンクの花を着ける、ロンドンロンドンの町には大分此樹が植ゑてある、五月は此樹の花盛りで、案外に美しい、中には白花もあるが多くは紅花ピンクだ、日本の櫻位の美しさはあるが、櫻程の氣品はない、許六の百花譜にでも書いたら、「此花美しけれど田舎娘の鄙さびびたる風情是非もなし」とでも云ふべきであらう。

英國の樹木は大低右の通りであると思ふ、觀賞には大分よい、併し建築用としては、餘り役に立つまいと思

ふ、五六間の棟材を得ることは、殆んど不可能であらう、若し英國の建築が木造であるとすれば、其困難は察せらるゝ、石造若くは煉瓦造に赴いたのも、決して撰擇の結果ではなく必要からであらうと思はれる、片田舎の百姓家などに、日本ならば掘立小舎と云ふべき所が、皆石塊を集めて築き立て、ある、いかにも原始的で素朴なることは掘立小舎と變りはない、木材を集めて造りたいが、木材がないから止むを得ず石を集めて造つたといふ風だそれ等を見ると、石を集めて造り始めた小舎の發達したのが、西洋今日の煉瓦造りで、丸木を集めて造り始めた小舎の發達したのが、日本今日の木造家屋だといふことが首肯せらるゝ、偶ま石塊で始まつた建築は發展の途が無限に長く廣いが、丸木で始まつた建築は發展の途が短くて狭く、最早窮まる處まで達して仕舞つたといふに過ぎぬ。

山嶽や河川やに就ては、まだ少しも研究してないが、要するに富士や阿蘇はない、利根川や富士川や玖麻川もないやうだ、かう考へて來ると、大分心強くなつて來るが、まだ安心はならぬ。

こんどは天氣と氣候に就て陳べて見やう。

天氣は常に陰鬱だ、夏の間は比較的晴天が多いのであるさうだが、五月以來三ヶ月否殆んど四ヶ月になるが、晴天といふ日は數へる程しかなかつた、尤も英國の夏は大に降るか大に照るか、大に陰氣か大に陽氣か、何れか一方に偏して居るのが通例であるが英人はいふが、今年は何れでもなく、照りもせず降りもせずである、偶ま朝から晩まで晴天の日があると、翌日の新聞は昨日の日光の事に就て大なる吹聴がある、ロンドンでは日光が十二時間續いた、ブライトンでは十時間續いたといふ風に各地の日光繼續時間の表を載せる、以て日光の珍らしく貴重であることが想像せられやう、殊に夜間の晴天は珍らしいやうだ、予は四ヶ月間に月

の姿を見た事が數回に過ぎぬ、星の數などは實にまばらなものだ、こんなに珍らしいから、星の相場が高く、地にあつては花天に在ては星なごゝ騒がれるのではあるまいか、日本のやうに星といふものが平凡なものであれば騒ぐ必要はない譯だ、丁度日本では鯛といふ魚は餘り顧みられぬが西洋では貴重なものになつてると同じ經濟的原則の下に支配されてるのではあるまいか、尤も近頃は日本でも星莖黨なごが、今更らしく星の相場附を高くして居るから一概には云へぬ。

このやうに晴天は少いが雨天も少い、年に依つては雨斗り降つてるさうだが、今年は薩張り降らぬ、偶に降つても直ぐ止む、殊に雨量の少い事は驚くばかりだ、尤も雨量の少いのは今年ばかりではなく、いかに大降りに降る年でも、雨量は日本の十分一もないさうだ、日本では東京で最大雨量が一時間二時半立方であるといふのに、倫敦では二十四時間に四分一時立方であるといふ、尤も二三年前に二十四時間三時九立方の雨が降つたといふが、これは英國の記録を破つたものであるさうだ、一時間二時半と二十四時間三時九とでは非常な差である、それでも倫敦では大騒をしたといふ、東京でさへかうである、東京の二倍もある熊本雨量なごゝは比較にならぬ、それでも英國は歐羅巴中で一番濕氣の多い國だと云はれてある。

此事を考へると英國の建築を、其まゝ日本に移す事の危険な事が直ぐ分る、上野の博物館内に出來た表慶館は、西洋の美術館を其まゝ摸したものであるさうだが、日本の濕氣の事を考へなかつたので、室内には常に濕氣が満ちて壁の表面には始終露が乾ぬ、従つて陳列せる美術品も長くは置けぬといふ事だ、先づ此等は失敗の好摸範であると思ふ、又當地の建築には皆な地下室があるが、これも濕氣の少い當地だからよいので、是なども下手に日本へ移植したなら屹度馬鹿な目を見るであらう、先づ日本では煉瓦造りの住宅などは餘程

考へ物であらうと思はれる。

雨量の少い事此通りであるから従つて地中に水氣のない事も非常なものだ、御存じの通り、倫敦には地下鐵道といふものがある、地下數百尺の下に大なる鐵管を伏せて電車を走らせるのだが、之を造る時に水が少しも出なかつたといふ、日本ならば水が出てく、迎も始末にならなかつたと思ふ、予の友人で或る工學士が目下倫敦の土木業を視察に來て居る、此人の説に依ると、倫敦の地中には水分が少いから、建築には基礎工事が非常に樂であるといふ、詰り地盤が非常によいといふ事になるのださうだ、當地の大建築も實は此地磐に頼る事が多いのださうである、テムス河に架した幾多の大鐵橋の如きも、此地盤でこそ出来るのだといふ、中にも塔橋タウナリッジになると、河の中に二つの素晴らしく大きな石造の塔が立つて居て、橋を釣つて居るのであるが、地盤が日本のやうなら、迎もかう重い塔は建てられまいといふ事である、要するに何事も地盤あつての建物である、雷に橋や家屋ばかりではない、精神上の事でもさうである、文藝なり道德宗教なり、西洋の社會的地盤があつて初めてあのやうなものがあるのである、新しい思想なり新しい女なり、皆な地盤あつて現れた現象だ、此方へ來て此方の社會的地盤を見ると、あんなものゝ現はれるのは全く自然だといふ感がする。最後に氣候はと云ふと、これも日本で聞いたり、想像したとは大分違ふ、五月以來、今夏が来るか〜と待つて居たが、どう〜來ぬ、概して東京の四月初めの氣候で、只今八月下旬まで打通した、尤も八十度以上位になつた事が數日あつた、それも一日の中二三時間に過ぎぬ、其時の騒ぎと云つたらない、新聞紙には暑氣の爲めに死んだ者の數が幾十百と數へあげられる、滑稽な事夥だしい、併しさういふ御當人も随分苦しんだものであるが、其故は家屋と衣服とが暑氣に適應せぬからである、日本の家屋で日本の浴衣で居たら、丁

度一番心持のよい氣候であるのだ、これも亦洋服洋館が日本には適應せぬ証據である。

序ながら、當地の樹や草が濃艶な綠色を保持する所以も、此の春があつて夏がないのに原因すると思ふ、日本でも若葉の時は新緑滴らんと欲するなど、云つて美しいものだが、其美しさが夏の日光の爲め焦がされる事がないから、あのやうな色彩のまゝで三四ヶ月を経過するのではあるまいかと思ふ、尤も此八月中旬から道の濃綠色もやゝ衰へて、今は丁度日本の夏の色位になつて居る、樹木の葉は既に散り始めた、桐の一片といふ處で、遊子の腸道がに穩かならぬものがある。

そんなら冬はどうかと云ふと、これは經驗せぬから斷然たる事は云へぬが、當地に永年居る日本人の説では東京よりも寒氣は餘程穏かだと云ふ、緯度から云ふと、當地は北緯五十一度で、樺太と魯領との境よりも一度北へ偏して居るが、例の暖流のた陰でこんな暖かなのださうである、只だ其冬が日本よりも餘程長い、そして霧が時々かゝる、日光は勿論滅多に見られぬ、それが不快だといふ、そして日も短いのであらうと思ふ、其代り夏は馬鹿に日が長い、今でも夜の明けるのは五時前で暮れ切るのは八時だ、それに蚊は居ず、蚤は居ず、氣候は四月初旬櫻時のやうであるから、夏は至極結構だ、結構であるべき筈だ、併し人間は我儘なものだ、そして四十年馴らされた故郷の風土といふものは致方のないものだ、行水を遣つて浴衣懸で團扇片手に蚊を追ひながら庭を眺める快味は、思ひ出しても、ぞつとする程懐かしい、之を思ふと日本へ還つてから、熊本の夏は苦しいなどいふ贅澤は決して云ふまいと思つて居る。

さてこれから少し英國の人間に就て記して見やう。